


<p>団体名</p>	<p>青年海外協力隊山口県OB会</p>	<p>活動タイトル</p>	<p>山口県に住む外国にルーツをもつ子ども達が日本語で夢をあきらめないための支援事業</p>				
<p>望ましい社会状況および団体のビジョン（社会的役割と活動基盤）</p>			<p>■活動風景</p>				
<p>●地域の望ましい社会状況(ビジョン)</p>	<p>山口県において、外国にルーツを持つ子ども達が、自らの望む将来に向けた人生の選択ができる。そのために、子どもの年齢や来日時期、学習経験、将来の目標などに応じた日本語の習得と教科学習の支援が手法として確立し、希望すればそれらを受け取ることができる状態になる。</p>		<p>絵本の読み聞かせ 子どもへの個別指導後には、全体で紙芝居・絵本の読み聞かせ・歌・発表などを行う。</p>				
<p>●団体の社会的役割（ミッション）</p>	<p>当会では2021年3月から、試験的に子どものための日本語教室を実施してきた。来日してから数年経ち、会話はできるようになって、学校の教科学習についていけない子どもや、来日して間もなく初歩的な日本語を習得する時期に適切な支援が受けられていないという子どもに出会い、その都度対応してきた。その関わりが継続的なものになるにつれ、学校との情報共有なども行えるようになってきたが、集団指導である学校だけでは対応できないという状況もわかってきた。 学習機会の提供という役割とともに、日本語支援員の配置の拡充や、来日初期は通訳者ではなく日本語教師を支援者として配置するといった行政への働きかけも行っている。</p>						
<p>●団体の活動基盤</p>	<ul style="list-style-type: none"> ●望ましい人的資源：指導法や教材を作成し、ボランティアを指導できる、子どもの指導の専門性持つ日本語教師が複数名育成される ②散在地域の様々な場所で事業を実施するための運営を担うボランティアが育成される ③関わるスタッフが皆、ファンディングの意識をもち、団体を広報できる存在になる ●望ましい物的資源：オンライン指導などを実施するために必要な機材や指導に使える会場が複数確保されている ●望ましい活動資金：人的資源を確保するために必要な人件費相当の資金が、毎年一定の寄付によって確保されている ●望ましい情報：連携につながるネットワークにつながり、当会の情報やノウハウが県内の他団体に伝わっていく 						
<p>■活動報告</p>		<p>■1年間の目標に対する達成状況(まとめ)</p>					
<p>外国にルーツをもつ子どもを対象とした、日本語及び教科学習の指導を、山口市内5か所、防府市1か所（各所週1回）で、62名に対して実施してきた。（延べ277回）また、中学生や高校生のニーズが多様になり、部活等で会場に来られなかったりするため、オンラインでの個別指導を初級、中級、数学などニーズに合わせて6名に実施。（延べ152回） 本事業の成果を数値的に表す試みとして、DLA（外国人児童生徒のための対話型アセスメント）の実施と評価をスタッフで行えるよう、外部専門家に協力いただきながら実践を積んだ。 また、多様なニーズに対応していくため、オンラインで指導できる支援者の育成のための研修などにも取り組んだ。 高校受験に向けた調整や、小学校入学準備のためのプログラムなども行う中で、指導だけではない保護者と学校との調整や、保護者のサポートがスタッフの役割として広がっていった。</p>		<p>個別のケースに合わせた指導（集団・個別・オンライン）を継続し、合わせて高校受験に向けた支援や、小学校入学前の支援など、多様なニーズに対応したことで、スタッフ4名が経験を積み、指導法やノウハウ、関係機関とのネットワークなどを蓄積していくことができた。それによって、他団体で始まった子どもへの日本語支援の場をサポートしたり、指導者育成のための研修を企画・実施したりすることができた。 自らが主催する活動報告会や情報発信だけでなく、外部講師としての講演の機会や日本語教育に関する研究会等、メディアに取り上げられる機会も増え、各スタッフが自団体の活動を伝える役割を担うようになってきた。 それらの発信や継続的な活動を行っていることで、行政や国際交流協会、学校現場などから、外国ルーツの子どもとの相談が寄せられるという立ち位置が確立してきた。</p>			<p>親子にほんごプレスクール 小学校入学前の親子に日本の学校生活全般や準備することを説明し、個別相談を行った。</p>		
<p>■事業を通じて得られたノウハウ</p>		<p>■望ましい社会状況を達成するための課題</p>					
<p>■個別のケースに合わせた指導（集団・個別・オンライン）や、高校受験に向けた支援、小学校入学前の支援などの実践 子どもの年齢や母語のレベル、母国での就学状況、来日時期、将来的な計画など、子どもと家族の状況を把握し、その子どもに必要な指導をスタッフで共有し、指導にあっている。特に中学3年の子どもに対しては受験に向けた教科学習、教科に対応するための日本語学習、面接練習、学校と保護者との話し合いの仲介などを行い、これまでの指導とはまた違った新たな実践を積むことができた。 ■DLA（外国人児童生徒のためのJSL対話型アセスメント）の実施と評価 自団体ではDLAの評価までを行った経験がなかったので、統一した基準で実施と評価ができるよう内部研修を実施。また、評価測定に外部専門家の助言をもらい、一連の流れを実施することで、自団体で実施するスキルが養われた。 ■指導者育成のための研修の企画・実施 オンライン指導のニーズが増えていくことが予想され、それに対応できる指導者を育成するため、現在オンライン指導を担当しているスタッフを中心となって研修を実施。自団体のノウハウを研修という形にする経験となった。 ■他団体での子どもへの日本語支援の場の立ち上げや運営サポート 当会の活動を知り、自分たちも外国ルーツの子ども達の学習を支援したいという他の団体に対して、立ち上げ期の話し合いの立ち会い、指導内容やテキストの紹介、対象者への連絡、当日の運営サポートを行ったことによって、月2回の定期的な実施となっていった。これまで自</p>		<p>これまで、学校の外部からできることは、子どものニーズに合わせてできることは行ってきたが、学校現場の中に入ってきた指導は、教員免許の有資格者でなければならず、資格がなければ通訳という立ち位置でしか入れない。学校現場の職員配置も十分でなく、教員側も外国ルーツの子どもへの指導には試行錯誤している中、そういった規制が緩和されることで、支援が受けられる子どもが増え、選択肢が増えることにつながる。また、外国ルーツの児童生徒の指導を行える人材を育成する仕組みも必要である。日本語教育あるいは学校教育の専門性を持つ人材に対し、他方の専門性を身につける機会を提供したり、人材交流によって見識を深める場を設けることなどにより実現できると考える。</p>			<p>この1年間の活動を通じて</p>	<p>情報発信や継続的な活動が徐々に認知されるようになり、人・もの・おかねの協力を得られる体制が軌道に乗り、活動を続けられる基礎作り</p>	<p>を達成しました。</p>
<p>■活動成果のアピールポイント（自由記入）</p>		<p>■受益者の具体的な変化（自由記入）</p>					
		<p>子どもたち・保護者・学校等とのコミュニケーション頻度が高まり、頼れる相談先として認められるようになった。 教室のコミュニティを通して、外国ルーツの子どもたち相互、保護者相互につながり、さらに地域社会での活動参加にもつながった。</p>					